

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.221

ISSN 2432-5295

はじまる、 はじめる

C O N T E N T

- ◆【はじまる、はじめる】…01～04
- ◆今、こんな仕事しています…05～08
- ◆新人紹介…09
- ◆近況 & イベントのお知らせ…09～10
- ◆まちかど…裏表紙
- ・ご近所てくてく散歩のススメ

はじまる、はじめる

新年度のはじまりは、これからはじまること、これからはじめることへの期待がふくらむ時期です。通常なら。

今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、いつもとは様変わりした新年度のはじまりとなりました。学校も4月から登校できず、これを機に9月のはじまりにしてはどうかという議論もあります。緊急事態宣言が発出されて以降、当社でも在宅勤務が原則となり、新入社員も4月当初に数日間、事務所に出社しただけで在宅勤務がはじまりました。

そんな中、最近コロナ後の社会の変化について、いろいろな人の発言が見られるようになりまし。この間、私たちの生活スタイルは確実に変化しました。

この変化は一時的なものに終わるものもあるでしょう。しかし、確かに新たな社会のはじまりを予感させるものもあります。

さて、本号のテーマは「はじまる、はじめる」としました。コロナ後の社会などという大それたものはありませんが、これからはじめること、これからはじめること。

職員のそんな小文を集めました。

レタースアルパック編集委員会

地域をおいしく、おもしろく。

立命館大学食マネジメント学部 高田剛司



図 立命館大学食マネジメント学部のキャッチフレーズ
出典: <http://www.ritsumeit.ac.jp/gast/>

建物6階の研究室から遥かに望む琵琶湖の存在は、これから「はじまる!」、これから「はじめる!」という気持ちの高ぶりを穏やかにしてくれます。

私は、1996年から24年間勤めたアルパックをこの春「卒業」し、4月から立命館大学食マネジメント学部に移しました。この学部は、滋賀県草津市のびわこ・くさつキャンパスに2年前に開設された新しい学部です。

食マネジメント学部のキャッチフレーズは、「世界をおいしく、おもしろく」。この響き、なんだかワクワクしてきませんか?

食を通じて人間や経済、社会、文化などを学び、食に関する人類的課題の解決に寄与できる人材の育成を目的としたマジメな学部ですが、仲間とともに五感を使った



研究室から望む景色

おいしい食の体験が、学問を面白くさせてくれるはず。このフレーズにかけて、私はこれから学生たちと一緒に、「地域」をおいしく、おもしろく。」していきたいと考えています。

半年前になりますが、TBS日曜劇場でキムタク(木村拓哉)がシェフ役として主演したドラマ「グランメゾン・東京」が放映されました。三つ星レストランを目指す物語なのですが、フレンチ料理にも関わらず、日本の地元産の旬の食材やジビエにこだわりの、その生産者との人間模様を描いたところがとても印象的でした。地域によって気候風土が大きく異なる日本には、その地域ならではの食材が数多くあります。一方、流通や技術

の発達により、各地の食材や食文化が失われつつあるのも確かです。私は今年度から3回生のゼミを受け持つとともに、フィールドワークを伴う演習の授業を担当します。私の授業に履修登録した学生の意見を聞くと、「地域おこし」や「まちづくり」に関心を持っている人がとても多いことに驚きました。そして、自分の生まれ育った地域に愛着や誇りを持ち、自分が将来、地元で役立ちたいという強い気持ちを持った学生がたくさんいることをうれしく感じました。

全国各地から集まった食マネジメント学部の学生たちと、これから各地に元気を届ける、「おいしく、おもしろい」まちづくりをはじめます!



立命館大学びわこ・くさつキャンパスの春

近代都市計画と幼児施設 そのはじまり、そのつながり

三輪泰司：名誉会長



2020年は、年初から、COVID19、すなわち、新型コロナウイルス感染症のパンデミックを経験しました。実は、人類史は古くから、病原微生物による感染症との闘いの歴史でした。

伝染病から始まった チャドウィック・レポート

「都市計画」を学んだ人は、エドウィン・チャドウィックの名をご存知でしょう。1838年の新救貧法制定に携わっていた彼は、1842年、イギリス議会へ一般報告『イギリスにおける、労働者階級の衛生状態』を提出しました。議会は王立委員会で審議し、1848年『公衆衛生法』(Public Health Act)を制定しました。実は、これが近代都市計画の始まりと言ってよいのです。1848年といえば、日本では嘉永元年。5年後の1853年(嘉永6年)6月、ペリー司令長官のクロフネ来航で、夢を覚まされるのです。

18世紀半ばからの産業革命は、動力や機械だけでなく、都市の様相も変えてしまいました。工場生産様式の発達は農村から労働力を吸い上げ、手工業者や商人のまちは、工場労働者の居住地になりました。資本主義の母国といわれるイギリスは、その最先端を行きました。世界に版図を拡げ、国内では産業資本家がのし上がり、ビクトリア朝イギリスは、かつてない繁栄をたらしめました。が、反面、植民地では、収奪への抵

抗が、国内では貧富の差が拡がり労働者の反抗が激しくなりました。その上、ロンドンなどは、犯罪と伝染病の流行で危険で不潔な街になっていました。

病原菌説と水 ジョン・スノウの調査研究

19世紀のロンドンには、たびたび、コレラの流行に見舞われていました。記念館があつて、イギリスでは、麻酔医でもあつた医師・ジョン・スノウの名は、よく知られています。1854年、ソーホー地区でコレラが集中的に発生した時、スノウは地域住民への聞き取りで、原因がブロード・ストリートにある一つの給水ポンプであると突き止め、ポンプを止めました。この行動でコレラの流行を食い止めたと言われています。古代から、天然痘はじめもろの感染症は、「瘴気」と言つて、悪い空気のせいだと信じられていました。一方、大昔から、牛飼いは天然痘に罹り難いといった伝承もありました。1798年、種痘法を発表し、免疫学の祖と言われるエドワード・ジェンナーもイギリスの医師でした。

スノウは、コレラ菌を発見したのではありませんが、瘴気ではないことを証明したことで、「疫学の祖」の誉を与えられているのです。サニタリー・アイデアと言われる公衆衛生の思想は、下水道建設という最初の都市計画事業として

ピープルの前に現われます。下水道はフランスにも及びました。遅れて資本主義へ進んだドイツでは、細菌学者、ロベルト・コッホによるコレラ菌発見(1883年)など、疫学の発達による予防接種が下水道にとつて換りました。我が国はもつと遅れていました。

歩道と下水道 チャドウィックとベンサム

チャドウィックは公共歩道と公共庭園についても提言しています。アーサー・コナン・ドイルは、「シャーロック・ホームズの冒険」で19世紀末ロンドンの街を描いています。富裕層が住むウエストエンドでも、家々にはトイレがなく、汚物は窓から道へポイと捨てていました。金持ちは馬車に乗りますが貧乏人は、その上をバシャ、バシャと歩くのです。『公共歩道法』(Public Walk Bill)は、まず歩道を作るべしという立法です。

世の中を見て、眼前の問題を解決するために、果敢に立ち向かう、これは何時の時代も、何処であつても、人間社会の一員たる者の使命であり、そのような人間は社会的存在たり得るのです。

チャドウィックは、後に、サーの称号を受けますが、「功利主義」理念の創始者である哲学者・経済学者・ジェレミー・ベンサムの弟子です。その思想は「最大多数の最大幸福」として知られています。功利主義とは、公益主義又は、「利

他主義」といふべきです。**福祉と教育 オウエンとニューラナーク**

チャドウィックより、やや早いロバート・オウエンの名を聞いた人もあるでしょう。オウエンは、若くしてマンチェスターで紡績工場の支配人を勤め、いろいろな技術改良を進めて工場経営に成功した人で、合理的、進歩的な考えの持ち主でした。

1798年、オウエンは、スコットランドのニューラナークの紡績工場を買収し、工場主になりました。当時の工場は、とてもひどい環境で、労働者の暮らしはすさみ、安上がりな労働力として、5〜6歳の子どもまでが連れてこられ、1日15〜16時間も働かされていました。このあたりは、チャールズ・ディケンズの『オリバー・ツイスト』などにリアルに描かれています。

オウエンは、支配人を務めていたニューラナークで、住居と一体にした紡績工場を造りました。子どものための施設もありました。こんにちでもイギリスで、Nursery School(保育学校)とよばれる施設で、「保育園」の始まりです。

イギリスは、社会福祉でも最先端を行つたのです。ニューラナークは、今や世界遺産になっています。「保育園」の聖地でもあります。オウエンは、その思想と実践から、「福祉事業と保育園の創始者」という誉を与えられるでしょう。

都市公園を活用した取り組みが広がっています

石川聡史：都市・地域プランニンググループ

平成29年の都市公園法の改正により、民間事業者が公園施設の設置管理に参画できることになりました。大阪市では天王寺公園や大阪城公園など大規模な公園で新しい展開が始まり、観光客の増加にもつながっています。

これらは主に大規模な公園での新たな施設整備を契機とした取り組みですが、最近では身近な公園を含む様々な公園でイベントが開催されるなど、さらに活用の輪が広がっています。公園でのイベントというと従来は地域のお祭りや子供向けものがメインでしたが、最近はいろんなテーマで行われるようになってきました。

大阪市北区豊崎にある豊崎南公園では、年一回秋にヘアドネーション(Hair Donation)の普及啓発を目的とした映画の野外鑑賞会が行われています。

ヘアドネーションとは、病気や事故で頭髮を失った子どものために寄付された髪の毛でウィッグを作り無償で提供する活動のことで、公園に隣接するヘアサロンとヘアドネーション活動に取り組むNPOが主体となり、映画配給会社とも連携して実施しています。

また、バラ園やテニスコートで有名な大阪市西区の朝公園で



は、親子向けのイベント「えほんピクニック」が実施されています。地域の方などが参画する実行委員会方式で、企業とも提携して大掛かりなイベントとなっています。

これらは地域の方の「公園を活用して、もっと人々の役に立ちたい、地域を元気にしたい」といった思いからスタートしており、自治会や事業者などとの連携を模索しながら地域のイベントとして定着してきました。

公園の利活用にあたっては、そもそも公園でイベントを実施できることがあまり知られていない、利用に関する手続きが複雑であるなどの課題もあります。このような活動が定着しつつあることで、今後、地域の人々による公園の活用がより一層進み、これまでにない新しい活動が始まっていく予感がします。

まちの水道屋さんを残す新たな仕組みづくり

貴船律子：地域産業イノベーショングループ



我が国の小規模事業者は全企業数の約85パーセントを占めていますが、経営者の高齢化の進展により、事業承継が課題となっています。小規模事業者には、人々の生活を直接支える事業者も多く、その廃業は、地域の人々の生活利便性の低下につながります。断水や漏水した時、すぐに駆け付けてくれるまちの水道屋さんの存在もその一つと言えます。

そのような中、昨年度、中小企業の事業承継に係る調査を通じて出会った、神奈川県相模原市にある水道工事事業者の株式会社小池設備では、若い職人を育成し、独立開業を支援すること、事業を承継する新たな仕組みづくりに取り組んでいました。

「独立意欲のある人を募集」

どこの水道事業者も育てた職人を独立させたがらない中、当社では思い切つて、最初から独立を前提にやる気のある人材を集めたのです。その結果、社員も明確な夢を持って働くので、独立に関わらず、自ずと仕事にも力が入り、早い成長につながりました。

「事業承継から独立開業へつなぐ仕組みづくり」

次に、資金力がない若い人の独立に向けて、親会社が廃業する事業者を買収し、当初より100パーセント出資で、事業所を設立、将来の社長候補が事業の推進を担い、事業が軌道に乗ってくれば、親会社から株を買取り、独立経営するという流れを作りました。親会社は、株の買い取りにより、主資金を上回る回収ができるとともに、事業所ネットワークが広がります。また、初めから独立することを想定しているので、突然顧客を連れて退社するようリスクもなくなります。

社会の変化に対応した受動的な仕組みづくりを超えて、能動的思考で、新たな発想による仕組みづくりにチャレンジすることを教えてくれる事例ではないでしょうか。

新型コロナと地球温暖化

長澤弘樹：サステナビリティマネジメントグループ

緊急事態宣言がようやく解除された5月末にこの原稿を書いています。

ガラガラだった電車も人が増えてきました。このまま日常に戻ればよいと思う反面、揺り戻しへの不安も大きいです。

また、厚労省が、間隔を2メートル、マスクをつける、三密回避などの「新しい生活様式」を提唱しているのを目を引きます。

この「新しい生活様式」を見て思ったのは、新型コロナ対策と地球温暖化対策には似ている点があるということでした。

アルパックはこれまで国や自治体から地球温暖化に関する業務を多数受けてきました。地球温暖化対策の取組を大きくわけると、原因となる温室効果ガスを減らす「緩和 (mitigation)」と、温暖化そのものは避けられないことを前提に自然や人間社会のあり方を調整する「適応 (adaptation)」があり、車の両輪の関係とされています。

少し乱暴ですが、この「緩和」「適応」の区分を新型コロナ対策に当てはめると、ワクチンや特効薬を開発しウイルスが人体に与える影響を減らす取組が「緩和」で、ウィルスが世界に存在している状態を受け入れ、マスクの着用やステイホーム、ソーシャルディスタンシン

グ等の普及推進、社会経済活動を持続させながらもそうした取組が受け入れ可能な環境を整備するための各種給付金や補助事業などの支援策の総体が「適応」に当たるといえるでしょう。

新型コロナ対策の「適応」については、その規模と効果の大きさに目を見張りますが、一方で、中小企業向けの持続化給付金や特別定額給付金、アベノマスクなど、事業を巡る混乱ばかりが目につくのも事実です。

これにはいくつもの理由が考えられますが、「適応」の取組は費用対効果等を算出することが難しく評価が困難な場合が多いこと、営業自粛のように人によって受ける影響が大きく異なり評価が分かれることなど、「適応」特有の困難さもあるように思います。

実は、地球温暖化対策の「適応」も同じです。地球温暖化で「適応」の取組が本格的に進むのはこれからですが、今回の新型コロナ対策での混乱を参考にいうと、施策の実施根拠を可能な限り明確にして事業を進めることの重用さを改めて確認できたと思います。

一般化はできませんが、私にとっては新型コロナのもたらした知見もあり、こうした点を考慮しつつ、業務に挑みたいと思います。

新しいスタジアムの幕開け！

丸井和彦：アルパック OB



応援席から見るピッチの様子

的に降る日でしたが、スタジアムの内外は活気がいっぱい。収容人数は21000人と、身の丈に合った“キャパシティ”で、トラックがないので非常に見やすいスタジアムです。選手の息遣いまで聞こえてくるようです。試合はサンガが惜敗したものの、当日のチケットはあっという間に完売し、期待の高さがうかがえます。危惧された公道やJRの混雑も心配されたほどではなく、大成功のうちに終わりました。

3月からこのスタジアムで年間20試合程度公式戦が開かれる予定でしたが、1試合も行われないうちにJリーグは感染症拡大防止のため中断となっていました。平穏な日々が戻り、このスタジアムでまた試合を見たものです。

1月11日、亀岡市・亀岡駅前に京都府初の専用球技場である、「サンガスタジアム」が竣工しました。建設構想は20世紀からあったもののなかなか進まず、亀岡に建設されることが決まっても希少淡水魚の生態系に配慮して建設地を変更：と一筋縄にはいきませんでした。屋根に太陽電池が設置された環境に配慮しているとともに、大河ドラマ館やクライミングジム、フットコートが設置され、試合が無い日も訪れることができるよう工夫されています。

2月9日、西京極から本拠地を移したサッカーJ2・京都サンガが、セレッソ大阪を迎え、こけら落としとなる練習試合を行いました。横殴りの雪が断続



スタジアムの全景

【滋賀営業所開設】 三軒長屋の一角をセルフリノベーションしています

小川直史：
地域再生デザイングループ



入口（和室）

4月1日付で、アルパック滋賀営業所を立ち上げました。場所は東近江市の延命新地地区です。

近江鉄道八日市駅で降り、南に5分ほど歩くと延命新地に入ります。かつては花街だったこともあり、スナックや居酒屋が立地しています。また、町家や木造長屋が残っており、滋賀営業所は木造の三軒長屋の一角をお借りしています。

玄関を開けると、まっすぐ通り土間になっており、通り土間と並行して右側に2階へ続く階段が位置しています。左手には4.5畳の和室が3間続きます。和室を抜けると縁側があり、小さな庭にでます。近くには銭湯があるので、夏には仕事を終えてひとっ風呂浴びて、この縁側でビールをプシュッと…、なんていう想像が広がります。

ただ、5年ほど人が住んでおらず、埃は積もり、庭の雑草や



掃除の様子

木は伸び放題。畳がダメになっているところもあれば、トイレは汲み取り式で下水管が通っていないかったりします。1日かけて掃除をしました。1日かけて1階の和室が使えるようになったくらいです。

まだまだ掃除・改修を進めていきますが、あわせてこの営業所の使い方も考えています。営業所としての機能も果たしつつ、駅や商店街から近く、歴史あるエリアであることを活かし、地域の方々も使える、立ち寄れるような場所にしようと考えています。木地製品と地元食材を使った料理教室や畳で子どもが遊べるカフェ、コワーキングスペースなど様々なアイデアを話しています。これから約1年かけて長屋の改修と機能の構想を練っていきます。続編に乞うご期待。

↓豊岡市農業ビジョンはこちら



遠藤真森：
地域産業イノベーショングループ

「農」がまちを「豊」にする！ ～地方都市と大都市圏の2つの農業ビジョン～



「豊岡グッドローカル農業」の概念図と12の要素

■豊中市都市農業振興基本計画 チャレンジプロジェクト

- ①「(仮称) 援農隊」による農地の保全・活用
- ②市内事業者による豊中市産農産物の利活用
- ③高齢者社会福祉施設における農作業プログラムの推進
- ④豊中市産農産物の購入機会の拡大
- ⑤市民団体と連携した農地の保全・活用

兵庫県豊岡市と大阪府豊中市の10年先を目指した農業ビジョンの策定を支援しました。

一般に農業を取り巻く状況は非常に厳しく、その改善のために「豊岡市農業ビジョン」では、まず10年先にあつてほしい社会を描き、その中で農業はどうあるべきか、その実現のために現状を変えていこうというアプローチをしました。これまで市が取り組んできた「コウノトリとの共生社会への挑戦」の経過や価値観を踏まえたうえで、豊岡市らしい「良い」農業のあり方を再定義し、持続可能で幸せを感じる社会の実現に貢献する農業「豊岡グッドローカル農業」と表現しました。そして、設定した12の要素の実現に向け、農業に関わるすべての人がそれぞれを考えで取り組み、ムーブメントを上げていくことを目指します。

また、豊中市では「豊中市都市農業振興基本計画」の策定を支援しました。都市農地の動向

としては、2015年4月に「都市農業振興基本法」が制定されました。これまで「いざれ宅地化すべきもの」と位置づけられてきた都市農地は、都市に「あるべきもの」へと大きく転換されました。都市農業の継続により、新鮮で安全な農産物の供給に加えて、農業体験・交流活動の場、防災機能、やすらぎ、環境保全など、多様な機能の発揮が求められていることが特徴です。

豊中市には約63ヘクタールの農地があり、6割近くは生産緑地です。「農地をどう保全・活用するか」をテーマに、生産者の意向のもと、市民や事業者が参画する取組をチャレンジプロジェクトとして位置づけました。

「農」が息づくまちが、より魅力的に、「豊」になるために、今回の計画が役立てば幸いです。

※本業務は、地域産業イノベーショングループの原田弘之・武藤健司も担当しています。

美濃加茂市都市計画マスタープランと 立地適正化計画の策定支援を行いました

清水紀行：
都市・地域プランニンググループ



2018年度より、岐阜県美濃加茂市の都市計画マスタープラン（以下、都市MP）と立地適正化計画（以下、立適計画）の策定支援に携わりました。

美濃加茂市は、豊かな水を灌えた木曾川、飛騨、奥美濃の山並みを望むことができる豊かな自然環境、中心部には中山道太田宿や歴史的まちなみ、さらには県内有数の事業所の集積といった特徴があり、未だに若年世代の流入や人口増加傾向にある活力あるまちです。

今回の両計画を策定するにあたって、留意した点は数多くあるものの、大きく2つあったと考えています。

1つめは「ウォーカブルシティの実現」です。第6次総合計画では「ウォーカブルシティミノカモ」すべての健康のために歩き続けるまち」を標榜しており、その実現の手段として立適計画を策定しました。中心部（美濃太田駅周辺から中山道太田宿周辺）を歩いて楽しく回遊できるエリアとして再生を

図るとともに、周辺の暮らしの拠点（サテライト拠点）とを公共交通でネットワークすることで、市内の誰もが便利で快適に暮らすことができるまちづくりをめざしました。

2つめは「用途地域外での土地利用のあり方について」です。本市は非線引き都市計画区域であり市街地に用途地域が指定されていますが、本市の人口増加は用途地域外（所謂、用途白地）の加茂野地区が受け皿となっていました。当該地区は法に照らし合わせると居住誘導区域とはなれない一方、現状の都市活力を牽引する役割を担っている事実も鑑み、侃々諤々の議論の結果当該地区は都市MPの土地利用方針の中で田園都市ゾーンと位置づけ、今後宅地としての利用と農地としての保全を両立させる土地利用誘導を検討することを明記しました。今後、より実効性のある土地利用の誘導方策や仕組の検討が求められます。

その他にも人口減少、高齢化への対応、中心市街地の賑わい創出、雇用の場の確保など様々な都市課題に取り組む内容となっています。両計画を一体的に策定したことを好機とし、いつまでも住み続けることができる、魅力あるまちづくりが進むことを期待しています。

※この業務は都市・地域プランニンググループの岡本壮平、橋本晋輔も担当しております。

名古屋市立大学 学生会館の第二期改修工事が 始まりました

間瀬高歩：
建築プランニング・デザイングループ

公立大学法人名古屋市立大学（以下、「名市大」という。）は、1884年開校の名古屋薬学校と1943年開校の名古屋市立女子高等医学専門学校を源流とし、医学部と薬学部からなる公立大学として、1950年に開学されました。

その後、経済学部、人文社会学部、芸術工学部および看護学部へ続き、2018年には総合生命理学部を新設するなど、学術領域が拡充されてきました。現在では、名古屋市内に4キャンパス7学部7研究科を有する、学生約4500名、教職員約1850名からなる総合大学に発展し、研究成果を世界に発信し続けています。

名市大では、2020年に開学70周年を迎えるとともに、大学法人化15年目の節目となりま

す。これを契機として、さらなる愛校心の醸成を図るため、開学100周年を見据えた「開学70周年記念事業」が学内で進められています。

開学70周年記念事業におけるハード事業の中核として、2019年度から滝子（山の畑）キャンパスの学生会館リニューアル工事が始まりました。当該学生会館リニューアル計画・設計・工事監理は、当社が担当させていただいており、今春4月には第二期改修工事が始まりました。学生会館は1974年に竣



改修前の学生会館南面外観
手前はレンガ広場、写真右側の樹林地内には古墳がある。レンガ広場は、鍋屋上野浄水場で100年以上使用されていた古レンガを再利用。

工したRC造3階建て延床3200平方メートルの複合施設です。施設は、1階食堂・カフェ、生協購買、2階談話室、大ホール、3階会議室、サークル室、音楽室等の機能構成となっており、これら主要諸室を対象とした内装の全面的な改修、南面の外装改修を実施します。併せて、同窓会員が憩える空間や70年の歴史資料を収集・展示する空間が整備される予定です。南面の外装は65周年記念事業で整備されたレンガ広場と一体的なキャンパス景観を創るため、レンガタイル張りによるフアサード改修を行います。

第一期工事は、2019年度に2階大ホールの改修を実施しました。現在は一部利用を継続しつつ改修工事が進められ、2020年10月には開学70周年記念式典を迎え全面供用されます。将来にわたり、学生・教職員の皆様に親しまれる学生会館として再生されるよう工事監理を遂行していきます。

続・寺院境内の保育園を段階的に整備する 新乳児棟が完成

三浦健史：

建築プランニング・デザイングループ



アースカラーの外観

京都市三条京阪にあるだん王保育園での段階的整備について、レターズ212号でご紹介しましたが、今春、0、1歳児のための新乳児棟が完成しました。本園舎と離れていた乳児たちの生活の場が本園舎の近くに移り、保育園としての一体感が強まっています。

新乳児棟の整備場所については様々なパターンを検討し、境内から保育園への門のすぐ横、いわば園の顔となる場所になりました。まず以前に建っていた観音堂の配置や佇まいを継承したいと考えました。また本堂とほぼ隣接する位置となるため、本堂の存在感を妨げない外観、一方で生活の中では本堂を自然と意識できる園舎が良いのではと考えました。

新乳児棟の建物は2階建の切妻屋根の形状です。鉄骨造とし、基礎工事を低減、スパンを飛ばす一方、柱を一般的なコラムでなくH型鋼として平面上の制約を抑えた工夫をしています。

1階に0歳児、2階に1歳児の保育室を設けたシンプルな構成です。西側は隣家及び西日に配慮し窓を最小限とする一方、東側は本堂の大屋根を普段から意識できる大きな窓を開けています。幼児たちが遊ぶ園庭に面しては、乳児も覗ける円窓を低い位置に設けており、お互いが意識する関係が生まれています。室内は、昼寝や食事、遊び等使い方で空間を建具で仕切れるようにしています。

保育園の整備は今後、本園舎との接続部分を検討していく予定です。直近では、元の乳児棟部分を改修し、児童館移転の検討を始めています。一步一步変わっていくだん王保育園、お手伝いは続く予定です。



窓からは本堂（工事中）と園庭が見えます

滋賀県発 物流効率化に向けたプラットフォームづくり

山部健介：

地域産業イノベーショングループ



平成30年度から滋賀県における物流効率化に向けたプラットフォームづくりをサポートさせて頂いています。

物流業界を取り巻く現状として、近年はドライバーの不足や高齢化が深刻化しています。一方で、ネット通販などEコマース市場の急成長にともない、「多頻度小口配送」が増加したこと、効率的にモノを運ぶことが難しくなっています。例えば、10キログラムの荷物について、段ボール1個で1回に運ぶ場合と、10個に分けて10回で運ぶ場合を考えると、後者の方は効率的な運送が難しくなり、トラックの荷台にも空きスペース等が生じてしまいます。その結果、繁忙期にはトラックが足りない（「モノが運べない」といった事態も生じることがあります。

今後、業界全体でのさらなるドライバー不足や高齢化が進むことが予想されるため、物流効率化に関連するITツールやアイデアが多く生み出されているのが現状です。

上記は一般消費者の例ですが、企業にとつては、いつでも安心してモノを運ぶことができることは、事業を行う上で重要な要素です。滋賀県には多くのモノづくり企業が立地しており、物流事業者と協力しながら、安定した物流環境を整備することで、企業の競争力強化や新たな魅力の創造にもつながります。こうしたことから、滋賀県では平成29年に「滋賀のモノづくりを支える物流研究会」を組成し、物流課題の分析や基本戦略の方向性を検討するとともに、平成30年度からは、荷主企業や物流事業者などで構成される「物流効率化プラットフォーム」を立ち上げ、県内の様々な関係者を巻き込みながら、物流効率化に向けた運送スキームの構築を進めています。

物流分野における行政と民間による官民連携プラットフォームは、全国的にも新しい取組であり、今後の展開にも大いに期待されます。

地域の歴史や資源を見つめ直し、地域の主体的かつ持続的な取り組みをサポート

豊福宏光：

サステナビリティマネジメントグループ



グリーンスローモビリティ講習会



YASHIRO BAR

真庭市は、平成30年6月に「SDGs未来都市」に、また、その取組自体も先導的なものとして全国10事業の「自治体SDGsモデル事業」に選定されている地域です。

アルパックは平成30年10月から、社地区（221人、92世帯）における「未来集落形成モデル事業」に関わっています。昨年度は、地域総合整備財団へふるさと財団の地域再生マネージャーとして①「生業をつくって、地域の人口を増やしていく」②「40代以下の若者がゆくゆくは地域の担い手に」③「子どもたちに地域とのつながり（思い出）をつくり、帰ってくる人材に」を目的に、「寄合」でSNSや古民家利活用の勉強会、グリーンスローモビリティ導入検討、大御堂吹き替えに向けた茅刈イベント、若い世代へのヒアリングを行ないました。また、地域の主体的な取組として社地区で過去に作られていた「やしろもち復活」に向けて試作生



やしろもち商品化

産・販売をしました。また、昔の集落演芸会映像の上映会、集落の子供向けにお菓子づくりや懐かしの竹製おもちゃ（くす玉鉄砲、竹馬、竹とんぼ）を制作し世代間交流を図りました。さらに、奈良県明日香村へ古民家を活用した農家レストラン等の視察、大晦日は地域の竹を活用した竹灯籠を神社境内に展示する「竹あかり」で、子供たちの取組への資金調達の社会実験として寄付制YASHIRO BARを開催しました。

このような様々な取組から、集落の方々に変化が現れています。地域活動の中心であった社地区振興協議会の体制をキーパーソンに頼らない組織型へ再編、現在は5つの部会（宿泊部会／特産品部会／竹部会／情報発信部会／歴史・環境整備部会）が立ち上がり、集落の方々の主体性が出てきていると感じています。今年度は地域の歴史資産・里山景観を再度見つめ直しながら各取組を具現化及び持続化できるように集落に寄り添っていききたいと思います。

※この業務は、畑中直樹、中川貴美子、武藤健司、佐藤拓也も担当しています。

芸術文化事業のロジックモデルワークショップ ～新しい気づきの機会に～

稲垣和哉：

都市・地域プランニンググループ



ロジックモデルワークショップの様子

芸術文化事業の成果をどのように評価するかは難しい問題です。多くの人が芸術文化の価値を認識しながらも曖昧で評価がしづらいとして、これまで計画の外にあるものとされてきた経緯があるように思います。

そんな中、近年ロジックモデルを用いたアウトカム（社会インパクト）評価が注目されています。

ロジックモデルとは、事業全体を、関わる人（ステークホルダー）、活動（インプット）、活動結果（アウトプット）、社会的な変化・影響（アウトカム）等を用いて整理し、論理的な構造として示した、事業の設計図のようなものです。芸術文化のように価値が多様で曖昧さがあるものこそ、論理的にその事業の価値を定義することで、様々な主体と目的を共有し意思疎通

を図っていくことが大事であるとされています。

今回は、「大阪府市の芸術文化における補助金・助成金等に関する調査」に関する業務の一環で、Artangleの熊谷薫さんのサポートのもと、ロジックモデルを作成するワークショップを行いました。参加者は芸術文化行政に関わる大阪府市の職員、大阪アーツカウンシルの芸術文化の専門家や構成され、異なる立場のもと様々な意見が飛び交いました。ロジックモデルをベースにしたことで、発散することなく議論が進み、取組に対して相互の理解にずれがあったことに気づいたり、新しい価値を見出したりといった成果がありました。

日々の業務の中で、「今何のためにこれをやってたの？」という場面はよくあります。事業が目指す本目的の目的はあくまでも「アウトカム」であり「アウトプット」ではないというのを再確認する機会となりました。

※この業務は都市・地域プランニンググループの坂井信行も担当しております。

お詫びと訂正

前号の「建築を通して子供たちの想像力を養う活動を行っています」の団体名が間違っていました。
正：日本建築家協会（JIA）
誤：日本建築学会（AIJ）
謹んでお詫びと訂正をいたします。

暮らしをつくるために

都市・地域プランニンググループ
小島みのり

宮

城県仙台市出身です。大学までは宮城、大学院は東京で過ごし、最近大阪に引っ越してきました。東日本大震災をきっかけに、失われた建築物の歴史や人々の記憶に興味を持ち、大学では建築について学びました。その後、実際に建築物を使用して生活する人たちの目線から、まちがどのように計画されていくべきかを学びたいと思い、大学院では都市計画・まちづくりを専攻しました。実際に地域に入り込むプロジェクトに参加することが多く、それぞれの土地の暮らしや文化の背景にあるものを丁寧に観察することの大切さを学びました。

学生時代は旅行やプロジェクトで海外に行く機会が多かったのですが、少しでもその土地の言葉で喋るようにしていました。まずは形からはじめても良いのではないかと考えています。今後仕事で関わる地域でも、地域の暮らしや文化について理解する努力を惜しまないようにしていきたいです。



ポジティブシンキングで！

地域再生デザイングループ
太田雅己

兵

庫県洲本市出身で高校まで淡路島で過ごし、大学以降は大阪にいます。大阪に出てからそれまで日常でしかなかった地元のことが好きになりました。現在も空き家調査などのまちづくり活動に参加しています。

「はじまる」といえば新生活ですが、私達の年代（平成7年生まれ）は節目ごとに大きな出来事が起こっています。平成7年の阪神・淡路大震災の直後に生まれ、小学校入学と同時にゆとり教育に移行、中学校の卒業式の日には東日本大震災、そして大学院を卒業して就職する今年はコロナウィルス。

今回のコロナでは世界的に大きな被害がある一方で、オンラインの働き方が浸透したように、技術や仕組みの前向きな変化もあります。そういう変化の中で、これからの未来のまちづくりを考える議論に加わることが今は楽しいです。これからも節目には何か起こるかもしれませんが、逆境に対してポジティブシンキングで乗り越えていきたいです。皆様どうぞよろしくお願いいたします。



自粛生活からの学び

建築プランニング・デザイングループ
新開夏織

静

岡県富士市出身で、大学進学を機に大阪にきました。大学では建築を専攻し、大学院では、ゆたかに過ごせる地域環境のデザインや運営の在り方について、実践活動を通して研究していました。



4月を迎え、世間的にも色々な意味で新しい生活が始まりました。外に出て人と話すことが制限される中、私はよくラジオを聴いて過ごしています。音楽と旅をテーマにした番組や、テーマに沿って寄せられるリスナーの声とのやり取りを聞いていると、身の回りの出来事を越えた世界観に触れることができます。そして、こうしたところから知見を広げていくことの大切さに改めて気づきました。

これから、趣味や仕事を通して見たり、聞いたり、やってみたりして感じたことを目の前の課題に重ね合わせながら、より良い地域環境の形成に貢献する技術を磨いていきたいです。どうぞよろしくお願いいたします。

何気ない日常の変化

長谷川育世

都市・地域プランニンググループ

新型コロナウイルスの影響により、4月から5月末までの約2か月間の在宅勤務となりました。

日常の買い物や近所を散歩する以外はほとんど家の中で過ごすようになり、生活スタイルが少し変化したように思います。また、それにとまって私の家の近所でも少し変化がみられました。

私が住んでいるのは、大阪市の南部で近所には商店街があり、にぎやかな地域です。家の近所には、飲食店も多くあるのですが、休業している店舗は少なく、工夫をしながら営業を継続している店舗が多く見られました。多くのお店で普段店頭には並ばないお弁当が並んでいたり、テイクアウトのメニューが出されていたりと、自粛期間により昼間もこの地域で過ごす人が増えことも影響して、逆ににぎわいが生まれていたようにも思います。私も今日はどこのお昼ごはんにしよう

かと、近所を歩いて探すのが少し楽しみになりました。

営業自粛により、まちが閑散として寂しくなってしまうというよりは、しっかりと予防や対策をして、日常生活を維持している、あるいはできることを見つけているという印象でした。

自粛期間で在宅勤務になり、普段当たり前のようにしていたことが制限され憂鬱になることもありますが、その中でも小さな楽しみや変化を見つけることで、私なりに楽しく過ごせたのではないかと考えています。



散歩中に会った猫



店頭でお弁当を販売している様子

近況 & イベントのお知らせ

「コロナに負けるな！頑張ろう地域!!～メインストリート・ジャパン・プロジェクト」のポータルサイトを立ち上げました

中塚一
メインストリート・ジャパン・
プロジェクト運営事務局

新型コロナウイルスの影響が各地に及ぶ中、地域独自の賑わい創出の戦略・企画を練り、元気に活動していること（共創と競争）を相互に発信していく必要があります。そのため、アルパックが入手した国内外の精力的な取り組みや国・都道府県・市町村の支援情報等を紹介するポータルサイトを立ち上げました。

サイトでは主に、各地区での取り組みページでは、テイクアウト・デリバリー・移動販売、先払いチケット、通信販売、レシピ・作り方紹介、フードロス支援や、それぞれの地区の資源やポテンシャルを生かした一味も二味も違う「ぜひご紹介したい」おススメアイデアを紹介しています。その他の参考情報ページでは、メインストリートアメリカによるアメリカ各地の活動や独自の中小企業調査結果、ロックダウンが解除された海外各都市でのソーシャルディスタンス確保のアイデア、道路・広場・パークレット等を活用したレストランの回復支援、リモートマーケット、公共交通から自転車へのシフト等を

ご紹介しています。国、都道府県、市町村のコーナーでは、独自の支援施策などを展開されている自治体をご紹介します。

これらの情報は、網羅的ではなく SNS 等でのネットワークを通じて発信されている情報を元に、出来るだけ「旬」の情報を毎日提供するよう心がけています。

是非、それぞれの地域での独自の政策や活動等を検討される際の参考にいただければ幸いです。



関西地域における新たなベトナム人コミュニティの誕生

ホアン ゴック チャン：
地域産業イノベーショングループ

近年、関西地域をはじめ、日本に滞在するベトナム人労働者、留学生の増加が顕著になっています。2019年6月現在で、在留ベトナム人の数は33万人で、上位3か国・地域に突入し、他の国・地域に比べて対前年末比の増加率が最も高い割合（26.1%増）を示しています（出典：外務省）。その中で、留学生のための生活・就職活動支援団体や多世代交流団体等、様々なコミュニティがあるものの、ベトナム人間の「ナレッジ共有」を促す活動はそれほど広がっていない状況です。

異分野間の人材を融合したコミュニティ創生、知的共有による新たな取組の展開を目的として、Vietnamese Professionals in Japan (VPJ Kansai) が誕生しました。

2019 年末に、ナレッジサロンにてプロの通訳者をお



出典：Vietnamese Professionals in Japan (VPJ Kansai) 招き「AI とキャリアの影響」と題したトークショーを開催し、初披露となりました。今後も大手日系企業に勤めている大先輩や日本で起業されている経営者の経験共有、医療や教育等あらゆる分野のベトナム人専門家による技能実習生向けの啓発活動を広げていくことを考えています。ベトナム人一人一人の日本での生活・仕事で培ってきた経験等を活かし、本国の国づくり・まちづくりはもちろん、よりよい日越関係づくりに貢献できるように目指しています。

アルパックは、こういった若者がリードしているコミュニティづくり活動を応援しており、広報や会場提供等 VPJ Kansai の活動に協力しています。



出典：Vietnamese Professionals in Japan (VPJ Kansai)



西川八幡神社境内にある榎の木と百度石：榎の木は大木となり防風の役割を果たし、建材としても利用され、樹皮は染料や線香の材料にもなる

鮎子田稔理：
建築プランニング・デザイングループ



ご近所てくてく 散歩のススメ

令和2年が明けた時には、ほとんどの人が想像し得なかった新しい生活様式が始まっています。

アルパックでも4月初めの緊急事態宣言を受けて、原則在宅勤務、国内外の出張禁止、web会議の推奨など、勤務体制や自宅での過ごし方が目まぐるしく変わりました。

うがい、手洗いが当たり前となり、「顔も洗いましょう」「できれば家に帰ったらお風呂に入りましょう」と専門家の方がメディアを通して呼びかけているのを聞くと、ふと「禊」とか「祓い」という言葉が浮かんできます。

人類は古来から度々未知の疫病に悩まされながらも乗り越えてきました。目に見えない脅威が相手では武

力を以て闘うこともできず、人々はひたすら自然界に宿る神々へ祈ることしかなかったでしょう。そして、果てしない犠牲を払った末に、体を清めること「禊」や「祓い」を行うことで、

少しでも感染を防ぐことができるということ、会得したのではないかと思います。他にもさまざまなしきたりや風習が伝えられ、現代においては一見意味のないような風習や村のおきての中にも人々が無意識のうちに危険を直感し、その危険を遠ざけるために築き上げてきた智慧がまつています。

例えば、「通夜ぶるまい」の食事の支度は喪家では行わないとか、葬儀場で使用した物は持ち帰らない、といった風習も感染症と結びつけて考えられると納得できることがあります。

在宅勤務で



伊居太神社と伊居太古墳：尼崎市では最大規模の前方後円墳であったが、社殿地築造のため墳丘は石なわれていて、手水舎の奥に古墳の面影は垣間見える



伊佐具神社：延喜式に記載されている「式内社」主祭神：伊狭城入彦尊（いざぎいりひこのみこと）

一日中パソコンの前に座る日々の中で、少しでも運動不足を解消するため、早朝や休日には、歩いて行ける範囲の神社巡り散歩を続けています。感染拡大防止策で、鈴緒や手水は使用できないようになっていた神社もありましたが、改めて普段何気なく行っている手水の作法にも、先祖の教えが詰まっているように感じました。

アルパックで再開発に関わったJR尼崎駅前に住み始めて20年になるうとしています。普段は駅と家の往復だけで、地元を歩くことなどほとんどありませんでしたが、今回てくてくと近所を歩くことによって、遠くへ行かなくても身近に祖先の息吹を感じる場所を再認識することができました。

これを機に、しばらくはご近所歩きや図書館で地域の歴史を調べる時間を楽しんでみようと思います。

表紙写真：モダニズムデザインのはじまり、バウハウス（デッサウ・バウハウス校舎／撮影 坂井信行）



「レターズアルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
<https://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四條通高倉西入立売西町82

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F

名古屋事務所 〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F

東京事務所 〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 ユニゾ内神田1丁目ビル4F

九州事務所 〒810-0802 (株) よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F

ホーチミン 0908.CJ Building.2-4-6 Le Thanh Ton street. District 1 HCMC.Vietnam (ベトナム)

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

TEL(03)5244-5132 FAX(03)6273-7715

TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

TEL+84(028)6255-6732



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
Kikitoペーパーを使用しています。